

イワクラ探索記録

筑波山調査レポート (1)



古代筑波研究会・主任研究員

宮本 造徳

はじめに

5月8日に、古代史研究家の、鈴木旭先生(イワクラ学会副会長)が筑波山に初めて調査におこし下さった。この時は、まだ古代筑波研究会は発足しておらず、筑波山の磐座(注釈1)の実態も把握しておらず、予備調査であった。当日は、本会会長の吉田迪恵が、かねてから切望していたお宝山頂上の巨石を調査しにいった。また、筑波ふれあいの里にある夫女ケ石も調査しにいった。今回のレポートは、5月8日の調査報告をしてみようと思う。

六所・お宝山

このお宝山というのは、筑波山のふもとの東側にある六所地区にある山である。(写真お宝山1・2参照) このお宝山の左隣に宮山という山があり、筑波山を縮小した相似形とも言える不思議な山である。この宮山というのが、宮とい

う名前が示しているように、この山には神社があり「六所神社」というのである。この神社には、初代の征夷大將軍・坂上田村麻呂が東北征伐の帰りに立ち寄り神社の鳥居を寄贈したという伝説が残っている。その他にも歴史的事実として、鎌倉幕府の創始者・源頼朝も、この神社に知行を寄進している。これらの事例からもわかるように、800年代以降には存在していた神社のようである。しかも、歴史的にも有名な武将から強く認識されていたようである。ただ正確な神社建立はいつであるかということがわかっていない。理由として、明治期の神社整理の影響で廃社となっており、六所神社の宝物や大量の文書が失われてしまったためである。今回は、六所神社の問題には深くは触れない。今は都内のある宗教団体が、この神社跡をしつかりと管理している。



写真：お宝山. 2



写真：宮山とお宝山. 1

さて宮山の左隣にあるお宝山だが、山の高さは140m程であり、この山の西側斜面は崖のように切り立った斜面である。人が上るには不便である。

この山頂に巨石が多く存在している(お宝山頂上の磐座1・2・3・4参照)。この巨石と人間の大きさを比べてみると、一目瞭然なのだが、岩の高さが身長2〜3倍以上あり、周囲は10倍ほどある、このような巨石が忽然と置かれていたのである。しかも、1つや2つではなく、7〜8個ほどまとまった状態で置かれているのである。周囲は切り立った崖であり、このような巨石を持ち上げることが困難である。どのようにしてこの場所にあるのか、不思議な巨石群である。



写真：お宝山頂上の磐座 2



写真：お宝山頂上の磐座 1



写真：お宝山頂上の磐座 3



写真：お宝山頂上の磐座 4

鈴木旭先生によると、これらの巨石群は磐座であり、このようなまとまった形で存在しているのは、全国的にも珍しいとのことである。先生は、大胆な仮説をお話になられたのだが、

①磐座2は、平らでそりたった巨石なのだが、これに水銀(☿)を塗り、鏡のようにして連絡を取っていたのではないか。つまり、古代は筑波山の麓まで海が入っていたおり、船と交信していたのではないかという仮説を立てられていた。

②磐座3と4は、同じ磐座なのだが、これは周囲がまるく卵のような石である。これは磐座であり、卵石という種類の磐座だそうである。このような形状は、安産の神様として信仰していたのではないか、もしくは子宝に恵まれるように信仰していたのではないか(注釈2)。

③このお宝山の磐座の拝殿はどこになるのか。その位置は、六所神社の真北・宮山の頂上にあたり、お宝山の真西に当たるのである。地図で見ると、その場所は、等高線は極めてゆるやかで、ゆったり

とした丘陵地帯となっている。ここが拝殿になっていたのではないか。

というような話をなさって下さった。とにかく詳しい調査が必要であり、全容の解明にはまだ時間がかかりそうである。それでも、このお宝山の巨石群が、磐座とわかっただけでも、有意義な調査であった。

夫女ヶ原

この場所は、なだらかな丘陵とされており、現在は畑や宿泊施設となっている。古代から、人々が集うのに適した場所だったと思われる。万葉集の中に、筑波山での燿歌(かがい)に関する和歌がある。その燿歌が行われていたのが夫女ヶ原ではないかと現在は考えられているのである。男女が集ったということから夫女ヶ原という名前でよばれていると推察される。そこにあるのが、2つの巨石、夫女ヶ石(夫女ヶ石1・2参照)である。この磐座は、同じぐらい

の大きさの岩が2つ並んでおり、2つということから、男・女を表す象徴の磐座というように考えられているのである。他にも2という数字には、陰陽・月日・火水など、物質の根本を表す数であり、陰陽道の考えでは非常に重要な数である。



写真：夫女ヶ石1

左側に目玉のペトログラフ

この夫女ヶ石の右側の巨石は、鈴木旭先生によると「目玉」のペトログラフなのだそうである。ペトログラフというのは巨石などに刻まれている紋様のことであり、具体例として、目玉や生殖器のような紋様を指す専門用語である。夫女ヶ石は、目玉の紋様が刻まれているとのことだった。風化してしまっているが、まぶたと目の部分のラインはなんとなく残っていた。この夫女ヶ石は、磐座として信仰の対象となっていた可能性が高いとのことだった。このような目玉の磐座というのは、水源地の近くにあるそうである。実際にこ



写真：夫女ヶ石2

巨石が二つ並んでいる

の磐座の少し離れたところに地元の人が水を汲みに来るところがある。また、この目玉がまつすぐ見つけている所は、筑波山の頂上・女体山の方であり、ここがお祭りを行っていた場所であろうと推察できる。古くは、筑波山の周りに住んでいた人々が燿歌をしに、夫女ヶ原に集まり、神様と共に楽しいひと時を過ごしていたのではないだろうか。

おわりに

今回の調査は、大きな巨石があるところを中心にフィールドワークをしてみた。その結果、いくつかのことを発見できた。以下、まとめてみると、

- ①六所地区のお宝山頂上の巨石は、全国的にも珍しい。なぜなら磐座が複数まとまった状態で存在している。その中に卵岩というように磐座があり、安産や子宝に恵まれるように信仰していたのではないか。
- ②この六所地区は、古代は海がこ

これまで入って来ており(注釈3)、お宝山の巨石は、水銀(水銀)を塗って、鏡のように反射させ、船もしくは遠くの場所と交信していたのではないか。

③宮山の山頂には、お宝山の拝殿があったのではないか。

④夫女ヶ石は、二つで一つの「一極二元論(注釈4)」のような存在であり、右側の巨石は、目玉の紋様がある。ペトログラフで、磐座である。このような目玉の巨石は、水源地の近くにある。目玉は、まつすぐ女体山のほうを見ている。

ということがわかったのである。今回の調査で、筑波山には磐座が存在しており、それらを研究していく必要があるということを確認させられた。今まで、筑波山は、山自体を信仰の対象として考えられてきていたが、磐座という視点から、筑波山の山岳信仰を捉えなおしてみるというのも、非常に価値があることだと考えさせられた。

注釈1

注釈2

磐座は、イワクラ学会では「イワクラ」と表記している。古代筑波研究会では、「磐座」と表記する。

注釈3

この地区の伝承として、月水石神社にお参りした後、この六所地区のお宝山の頂上で食事すると子宝に恵まれるという話がある。お宝山というのは、この子宝が訛って付いたものではないかと推察される。

注釈4

実際に、筑波山の麓に「豊浦」という地名がある。

注釈5

陰陽道の考え方の一つで、物事は、一つの極から二つに分かれて存在しているという考え方。例として、一つの極として人をおくと、男・女という二つの源として考えることができる。

コラム

平らな関東平野にぼこりと突き出たような山容の筑波山は、日本最初の夫婦神、イザナミとイザナギを祀り、奇岩・巨石の山として名高い。今回紹介された夫女ヶ石も夫婦和合の象徴と推測されており、興味深い。

筑波山の存在する茨城県には奇妙な話が多く伝わる。イザナミ、イザナギの『四番目』の子供であるイワナガヒメを祀る磐座や、ヤマタノオロチ神話に始まる出雲神話を伝える数々の神社など。

現在の茨城県である常陸国一の宮、鹿島神宮の祭神タケミカヅチはイザナミが最後に産んだ神、ヒノカグツチの頭部をイザナギが斬り落とした際、逆る血潮の中より生まれた神である。鹿島神宮には地中深くに突き刺さっている要石が存在し、並み居る奇岩・巨石を押しつけて名実共に常陸国で最も有名な『イワクラ』である。書紀に曰く、タケミカヅチは出雲の国譲りの後、東国に入り、暴虐の限りを尽くすカカセオを討ち鹿島に鎮座したと言われる。例によって星の神カカセオの地元での人気は高い。

ことほど巨石、古代史ファンの間では高名な茨城県であるが、その歴史は混沌としてとらえ所が無い。要石が押さえているのは果たして地震を起こすなまずだけなのか。ご当地の方の更なる調査、研究の成果を期待したい。